

〔報 告〕

アルコール依存症者の妻の対処 —断酒会会員である夫のインタビューに基づいて—

磯野 洋一¹⁾ 野嶋佐由美²⁾

要 旨

アルコール依存症者の夫の飲酒に関連した言動・行動を受けての妻の対処を、アルコール依存症者である夫自身はどのように捉えているのかを明らかにすることを研究の目的にした。研究方法は、断酒会参加中かつ断酒歴が3年目以上の既婚者8名に対して、半構成的インタビューを実施し、夫の捉えた妻の対処について、質的・帰納的に分析を行った。倫理的配慮に関しては、研究者が所属する大学の看護研究倫理審査委員会の承認を受けてから、断酒会に研究協力依頼を行い、断酒会からの紹介を受けて、その後各対象者に口頭と文面にて研究の趣旨等を説明して、同意を得てからデータ収集を開始した。

結果、【夫の飲酒にとどめを刺す】【夫を放り出しつつ立て直す】【為す術が無くなる】【最終手段を切り出す】【断酒会に賭ける】【他人の助けを借りて自分の安定を図る】【自分自身を見つめ自分の世界を大切にする】【一歩引きながら支える】という妻の対処が抽出された。アルコール依存症である夫は、上記8つの妻の対処を認識していた。アルコール依存症者が捉える妻の対処の特徴について1) 共依存的対処, 2) 消極的対処, 3) 建設的対処が存在する考察を得た。

キーワード：アルコール依存症, 妻, 対処 断酒会, 看護

1. 緒 言

日本においてアルコール依存症者は増加傾向にあり、社会的にもアルコールに関連する問題に関心が高くなっている。長期にわたる多量飲酒は、アルコールへの依存を形成し、当事者の精神的・身体的健康を損ない、社会への適応力を低下させるばかりでなく、当事者の家族や周囲の人々にも深刻な影響を与え、社会的な損失をもたらすと警告されている。

アルコール依存症者の回復過程では、アルコール依存症者自身の苦悩に加え、その妻も混乱と疲弊の状況にあり、しばしば、両者の関係性悪化もまた深刻な問題を内包していることが指摘されている¹⁾⁻⁵⁾。アルコール依存症者の妻もまた、社会から否定的な

ラベルを貼られたり、社会的に孤立した状況におかれ、家族として問題から回避したり、問題解決に向けて努力をしている。このような現象に対して、すなわち、アルコール依存症者の家族が問題をどのように捉え、解決に向けて努力をしているかについては研究が進められてきている⁶⁾⁻¹³⁾。しかし、家族が、特に妻が直面している問題は、アルコール依存症者である夫との相互作用の中で規定されていく問題でもあり、家族も問題解決に向けての対処を当事者がどのように捉えているか知ることなくして、真の現象理解にはつながらない。アルコール依存症者である夫は、妻の対応をどのように捉えているかを知ることが重要であると考ええる。

そこで、本研究の目的は、アルコール依存症者である夫の飲酒に関連した言動・行動を受けて、妻がとった対処を、アルコール依存症者である夫自身が

1) 日本赤十字広島看護大学

2) 高知県立大学看護学部

どのように捉えているかを明らかにすることである。

II. 研究方法

本研究は、アルコール依存症の夫が捉える夫婦の関係性や相互作用などを明らかにするものであるため、質的帰納的研究方法を用いた。

1. 対象者：対象者は、断酒会に3年以上継続して参加している、既婚の男性アルコール依存症者。
2. データ収集方法：平成21年7月～11月にかけて、インタビューガイドを用い、一人1時間程度、1回ないし2回の半構成的インタビューを実施した。データ収集は対象者が希望した場所、断酒会の前後や大学にて実施した。
3. データ分析方法：インタビュー内容の逐語録から「夫の捉えた妻の対処」と思われる文脈を抽出し、意味づけ、コード化、カテゴリ化を行った。
4. 倫理的配慮：本研究は、研究者の所属する大学の看護研究倫理審査委員会の承認を得てからデータ収集を開始した。倫理的配慮を行ないつつ、対象者は断酒会から紹介を受けて、対象者に口頭と文面にて研究の趣旨等を説明して、同意を得てからデータ収集を開始した。対象者には、1) プライバシーの保護、2) 対象者の拒否する権利、3) 対象者が不利益を被ることがないように配慮する

こと、4) 研究の公表、5) 研究者への連絡などについて、承諾と同意を得た。

III. 結 果

1. 対象者の概要

対象者は計8名で、年齢は40歳代～70歳代で、うち50歳代・60歳代が6名と最も多かった。家族構成は1名を除き、妻と2人暮らしであった。結婚歴は約10年～60年。断酒歴は約3年～30数年、断酒会入会後再飲酒歴のある者は3名であった（表1：対象者の概要）

2. アルコール依存症者の夫が捉える妻の対処

アルコール依存症者の夫が捉える妻の対処の分析を行った結果、アルコール依存症の夫は、妻の対処を、【夫の飲酒にとどめを刺す】【夫を放り出しつつ立て直す】【為す術が無くなる】【最終手段を切り出す】【断酒会に賭ける】【他人の助けを借りて自分の安定を図る】【自分自身を見つめ自分の世界を大切にする】【一歩引きながら支える】として捉えていることが判明した。

以下、大カテゴリは【 】, 中カテゴリは《 》, 対象者の語りは「 」にゴシック体で示す。語りの中でプライバシーに関することは削除し、意味のわかりにくい箇所は（ ）で補った

表1. 対象者の概要

	年齢	家族構成	結婚歴	断酒歴	断酒会入会後再飲酒歴
A氏	50歳代	妻と2人暮らし	約30年	約20数年	1回あり
B氏	70歳代	妻と2人暮らし	約60年	約30数年	なし
C氏	60歳代	妻と2人暮らし	約20年	約5年	なし
D氏	60歳代	妻と2人暮らし	約40年	約6年	なし
E氏	60歳代	妻と妻の両親、娘と5人暮らし	約30年	約20年	数回あり
F氏	40歳代	妻と2人暮らし	約10年	約3年	なし
G氏	50歳代	妻と2人暮らし	約40年	約20年	なし
H氏	50歳代	妻と2人暮らし	約30年	約6年	数回あり

(表2：アルコール依存症者の夫が捉える妻の対処)。

1) 夫の飲酒にとどめを刺す

【夫の飲酒にとどめを刺す】とは、妻が夫の飲酒に対して、感情的にも行動的にも左右され、夫の飲酒を止めさせようとする対処のことであり、《自力で酒を阻止する》《飲酒に目を光らせる》が含まれていた。

(1) 自力で酒を阻止する

《自力で酒を阻止する》とは、妻が誰にも頼らずに自分一人で、夫の飲酒を止めさせようと夫に掛かりきりになり、言動や行動でひたすら飲酒を止めさせようとする対処である。具体的には、妻の対処について、Cさんは「(酒を) 持って帰ってきて隠しておいても、見つけられて捨てられるしょ、いたちごっこみたいなことだったけど」と語っていた。

(2) 飲酒に目を光らせる

《飲酒に目を光らせる》とは、夫の飲酒に感情的にも行動的にも左右され、一喜一憂しながら監視する対処のことであり。例えば、Aさんは「一応家の中にも一升瓶があって、それを家内がどの位飲んでるかということで監視しているんです」と語って

いた。

2) 夫を放り出しつつ立て直す

【夫を放り出しつつ立て直す】とは、妻が妻自身の身内や知人・友人を頼り、夫を自分の元から離すが、離しながらも夫の飲酒問題に巻き込まれる対処をとることであり、《急に自分の元から放り出す》《放り出せずに関わる》《夫と距離を取るようになる》が含まれていた。

(1) 急に自分の元から放り出す

《急に自分の元から放り出す》とは、妻が自分の身内や知人・友人を頼り、急にかつ強制的に夫を自分の元から引き離す対処である。例えば、Bさんは「ま～家族にしてみたら居ないほうが楽だから。だから病院へ放り込んでおいたら気楽なわけよ。眼の届く所で飲むわけでもないし」と語っていた。

(2) 放り出せずに関わる

《放り出せずに関わる》とは、夫を遠ざけようとするが、離れきれず飲酒問題に距離を取れない対処のことである。例えば、Aさんは「(病院にいれられたものの)、病院にいても駄目だからと言い張って、そしたら、女房も来てくれて…自分が帰ると言

表2. アルコール依存症者の夫が捉える妻の対処

大カテゴリ	中カテゴリ	大カテゴリ	中カテゴリ
夫の飲酒にとどめを刺す	自力で酒を阻止する	他人の助けを借りて自分の安定を図る	アドバイスを受け入れ始める
	飲酒に目を光らせる		自分の心の安定を図る
夫を放り出しつつ立て直す	急に自分の元から放り出す		過去の夫を公表する
	放り出せずに関わる	自分自身を見つめ自分の世界を大切にする	内省しつつ自分を変える
	夫と距離を取るようになる		自分自身を大切にする
為す術が無くなる	次の手が無く打つ手が無くなる		夫以外の家族員に目を向ける
	絶望感で何も出来ない		自分を保つ
最終手段を切り出す	離婚話を切り出す		腹をくくる
	妻自身の本音を伝える		断酒生活を決心する
断酒会に賭ける	断酒会へのきっかけを作る	一歩引きながら支える	陰の協力をする
	断酒会に期待する		夫と共に生活を改める
	断酒が可能と思わないが断酒会に賭ける		優しさを出す
	夫を引っ張っていく		

い張って（自宅に）帰った」と語っていた。

（3）夫と距離を取るようになる

《夫と距離を取るようになる》とは、妻が夫との隔たりを大きくする対処である。例えば、Bさんは、「（妻は）気が大きいというかね。そりゃ～当然飲んでるとまた飲み兼ねないということになるわけだけどね。けど、酒飲みはそういうものか、仕方がないというところもあったと思うし。（夫が）暴力振るうわけでもないし。どんどん飲んで飲まれてという状態やから、情けないっていうかね、そういうことだと思う」と語っていた。

3）為す術が無くなる

【為す術が無くなる】とは、妻が夫の飲酒を止めさせるために実施可能な全ての方法を試すが効果はなく、次の術が無いほどにやり尽くし絶望感に陥る対処であり、《次の手が無く打つ手が無くなる》《絶望感で何も出来ない》が含まれていた。

（1）次の手が無く打つ手が無くなる

《次の手が無く打つ手が無くなる》とは、妻が夫の飲酒を止めさせようとありとあらゆる方法を試して次の方法が無くなる対処である。例えば、Hさんは「なんでも方法を、その中でま～可能なことなんでもやってみる。入院して、入院しても駄目だったので、次に次は」と語っていた。

（2）絶望感で何も出来ない

《絶望感で何も出来ない》とは、妻が夫の飲酒を止めさせるためにあらゆる方法を試すが効果はなく、全く希望が持てない状態に陥る対処である。例えば、Hさんは「入院しても治らん、断酒会行っても治らんって、ある意味絶望もあったろうね」と妻が対処不能な状態になっていたことを語っていた。

4）最終手段を切り出す

【最終手段を切り出す】とは、妻が夫の飲酒を止めさせようとして全ての方法を試し失敗した後で、夫へ最後の切り札を出す対処であり、《離婚話を切り出す》《妻自身の本音を伝える》が含まれていた。

（1）離婚話を切り出す

《離婚話を切り出す》とは、妻が夫の飲酒生活に

見切りをつけて別れようと決心し、夫に離婚話を切り出す対処である。例えば、Fさんは「見切りをつけたのもう綺麗さっぱり別れようと思っていたのではないのでしょうか。もうここで本当に断酒をしてもらえなかったら、もう本当に別れようというふうな気持ちだったと思います」と語っていた。

（2）妻自身の本音を伝える

《妻自身の本音を伝える》とは、妻が夫の飲酒生活における妻自身の辛い気持ちを本心から夫へ伝える対処である。例えば、Aさんは「あんたがどうして飲むかわからないと言い、それなら私も帰る、もう仕方がないと言って」と語っていた。

5）断酒会に賭ける

【断酒会に賭ける】とは、長年飲酒生活を続けてきた夫が、断酒生活を送れるようになるとは信じ難いが、妻が断酒会で断酒への可能性を信じてみる対処であり、《断酒会へのきっかけを作る》《断酒会に期待する》《断酒が可能と思わないが断酒会に賭ける》《夫を引っ張っていく》が含まれていた。

（1）断酒会へのきっかけを作る

《断酒会へのきっかけを作る》とは、妻が夫の断酒のために断酒会にまず自分が参加し、相談する対処である。例えば、Eさんは「自分から進んではなかなか断酒会へ行くような考えはなかったけど、家内が断酒会を知るようなことがあって」と語っていた。

（2）断酒会に期待する

《断酒会に期待する》とは、断酒会の存在を知ったことで、妻は夫がもしかしたら断酒出来るかもしれないという淡い望みをかける対処である。例えばBさんは「（断酒会に）入会してやりだしたら、ま～あんた任せじゃないけどね、なんとかやるだろう、なんとかやってくれるだろうと、その当時からも多少はこう手放しではないけど、安心をしていたのではと思うけどね」と語っていた。

（3）断酒が可能と思わないが断酒会に賭ける

《断酒が可能と思わないが断酒会に賭ける》とは、長年飲酒生活を続けてきた夫が、断酒生活を送れる

ようになるとは信じ難いが、断酒が成功するかもしれないと断酒会に賭けてみる対処である。例えば、Bさんは「(断酒会入会に対して) 本当にやるのなら入ってやりなさいということは、不安なわけよ。そりゃもう、私(夫)の努力っていうか、ある意味もう賭けているわけよ。家内、口に出さなくてもよ。おそらく本当にやらないだろう、あれだけ飲んでいた者がね、本当にやらないだろうというのは本音だろ」と語っていた。

(4) 夫を引っ張っていく

《夫を引っ張っていく》とは、断酒会参加に気の進まない夫が断酒会に継続して参加し習慣化するよう、妻が夫を連れて率先して断酒会へ参加する対処である。例えば、Eさんは「例会へ来ることも、ま〜家内が最初は自分を引っ張ってくれた」と語っていた。

6) 他人の助けを借りて自分の安定を図る

【他人の助けを借りて自分の安定を図る】とは、妻が断酒会会員や会員の妻など家族以外の他人へ、あるいは夫以外の家族員へ目を向け、妻自身が自分の心を落ち着かせるための対処であり、《アドバイスを受け入れ始める》《自分の心の安定を図る》《過去の夫を公表する》が含まれていた。

(1) アドバイスを受け入れ始める

《アドバイスを受け入れ始める》とは、妻が断酒会会員や会員の妻から直接助言を受け、あるいは断酒会に参加することで自分なりに夫への対応などを習得して、少しずつ実践していく対処である。例えば、Eさんは「(妻が断酒会を) 見学して婦人部の先輩達がこう色々アドバイスを与えたらいいね。そういうことをしてくれた時期があっただけね。あの家族会じゃないけどあ〜ゆう場所ではね、うんとそういうことがあって、家内のこう変化がなんか見えてきたというか。ちょっと以前と違うな〜というそういう雰囲気になったのね」と語っていた。

(2) 自分の心の安定を図る

《自分の心の安定を図る》とは、妻が夫の飲酒行動に振り回されるのではなく、家族以外の人と関わ

ることで妻自身が自分の心を落ち着かせようとする対処である。例えば、Aさんは「自分が入会した時、20年止めている先輩がいて、(中略)、自分が妙な時、変な時はね、妻は頻回に何年も相談に行ってたね」と語っていた。

(3) 過去の夫を公表する

《過去の夫を公表する》とは、妻が例会の場を使い、夫の飲酒が酷く自分が苦労した時のことを体験発表することで、自分自身が抱え込んでいた思いを吐き出す対処である。例えば、Aさんは「家内が腹が立つ〜と言い、体験発表したから」と語っていた。

7) 自分自身を見つめ自分の世界を大切にする

【自分自身を見つめ自分の世界を大切にする】とは、妻が夫の飲酒に振り回されていた自分を深くかえりみて、夫のためだけではなく、自分のための考えや行動をするようになる対処であり、《内省しつつ自分を変える》《自分自身を大切にする》《夫以外の家族員に目を向ける》《自分を保つ》《腹をくくる》《断酒生活を決心する》が含まれていた。

(1) 内省しつつ自分を変える

《内省しつつ自分を変える》とは、これまで夫の飲酒に一喜一憂していた妻が自分を深くかえりみて、自分のために変わる対処である。例えば、Eさんは「家内のその、(夫が) 飲んでる時の態度というか、家族と一緒に(夫を) 責め立てたというような、そういうことを反省しているわけ」と語っていた。

(2) 自分自身を大切にする

《自分自身を大切にする》とは、妻が夫の飲酒中心の考えや行動、生活を改め、夫と自分を区別して自分の感情や行動、生活を重んじる対処である。例えばGさんは「自分の役割をし出したら、お互いのことに口出しするより自分のことをまずするようになって」と語っていた。

(3) 夫以外の家族員に目を向ける

《夫以外の家族員に目を向ける》とは、妻の意識が夫以外の家族員にもいき、夫だけでなく他の家族員に関する心配事や考え事などをして、夫の飲酒に

考えが集中しない対処である。例えば、Gさんは「子供のこと、孫のことを話すようになってね」と語っていた。

(4) 自分を保つ

《自分を保つ》とは、妻が、夫の飲酒中心の考えや行動ではなく、妻自身の心をよりどころとする対処である。例えば、Bさんは「小言も言わないしね、その代わり良かったねとか偉いねとか一言も言わない。言ってもらったことはない。じゃ～今日はちょっと御馳走しようかということも一つもない」と語っていた。

(5) 腹をくくる

《腹をくくる》とは、妻が、夫が飲酒しようがしまいが自分はどちらでも構わないと決心する対処である。例えば、Gさんは「その時はまた腹くくったというか、飲もうが飲むまいが、まっ、いいと思うて、その時にこう腹が決まったんじゃないかと思えます」と語っていた。

(6) 断酒生活を決心する

《断酒生活を決心する》とは、夫が断酒出来るように、妻も断酒会へ参加して酒のない生活に付いていこうと心を決める対処である。例えば、Aさんは「一緒に無理やり車へ乗ってね、例会出席してくれた」と語っていた。

8) 一歩引きながら支える

【一歩引きながら支える】とは、夫の断酒生活が継続出来るように、妻が明らかな言動や行動をするのではなく、一歩引きながら、人知れず夫と共に相互関係の中で行う対処であり、《陰の協力をする》《夫と共に生活を改める》《優しさを出す》が含まれていた。

(1) 陰の協力をする

《陰の協力をする》とは、夫の断酒生活が継続出来るように、妻が明らかな言動や行動をするのではなく、一歩引いて人知れず行う対処である。例えば、Bさんは「どう言ったらええかな～、やっぱりそこが一つの陰の協力じゃない。(夫の)行動に対してケチをつけたり、文句を言ったりすることはもう絶

対から足引っ張ることになるから、うちはそれがないから…」と語っていた。

(2) 夫と共に生活を改める

《夫と共に生活を改める》とは、妻が夫と共に行動したり共通の会話をするなど、飲酒時期の生活とは反対の生活へと夫婦共に変えていく対処である。例えば、Dさんは「順番にこう落ち着いてきて、そのうち家内も一緒に(断酒会へ)行ってくれ出して、まっ(夫婦の)新しい第二のステップが始まったみたいだね」と語っていた。

(3) 優しさを出す

《優しさを出す》とは、妻が夫の行動に対して慈しみのある言葉を伝える対処である。例えば、Gさんは「女房がしんどかったろう～と言ってね、えっと思いましたがね。そんな優しい言葉を掛けるようなことは何年も無かったですの」と語っていた。

IV. 考 察

アルコール依存症者8名のインタビュー内容から、アルコール依存症者である夫が自己の飲酒行動に対して妻がどのような対応を取ったかについて、対処という視点からデータ分析を行った。その結果、アルコール依存症者の夫は、妻の行動として、【夫の飲酒にとどめを刺す】【夫を放り出しつつ立て直す】【為す術が無くなる】【最終手段を切り出す】【断酒会に賭ける】【他人の助けを借りて自分の安定を図る】【自分自身を見つめ自分の世界を大切にすること】【一歩引きながら支える】の8つの対処を認識していた。

アルコール依存症の回復に、家族の対処が重要な鍵を握っていることを、高橋¹⁴⁾や西川¹⁰⁾、越智ら¹⁵⁾、安田¹⁶⁾らが指摘している。そして家族自身もどんな体験をし、当事者とともに否認を繰り返しつつ、共依存から脱却し、消極的な取り組みから問題に対峙する積極的取り組みへと変化し、家族も回復していくことが報告されている。

本研究で夫の視点を通して明らかとなった8つの

対処もまた、先行研究で指摘されているように、家族の問題に対する対処が推移していた。すなわち、共依存的な要素を内包した対処である“共依存的対処”から、問題に対して逃げ腰な対処である“消極的対処”に、そして覚悟を決めて問題に対峙する“建設的対処”へと推移していた。次に、これらの3つの“共依存的対処”，“消極的対処”，“建設的対処”について論じる。

1) 共依存的対処

先行研究でも、断酒前は「裏切られてもがまんする」や「しつこく説得する」，「自分自身を守るために酒を渡す」などの家族の対処が報告されているが、本研究でもアルコール依存症の夫の視点から妻の必死な行動が浮かび上がってきている。信田¹⁷⁾は共依存について「問題をおこすことで相手を支配しようとする人と、世話をすることで相手を支配しようとする人との硬直した二者関係を指す」と述べており、【夫の飲酒にとどめを刺す】は妻が夫の飲酒に対して、感情的にも行動的にも左右され、夫の飲酒を止めさせようとする妻の対処のことであり、夫は妻が《自力で酒を阻止する》《飲酒に目を光らせる》と捉えており、このような様相は共依存の特徴を含んでいる。

夫の飲酒というストレスフルな状態に対して、妻は飲酒を止めさせようと躍起になり問題を解決しようと対処する。夫も妻も個人差はあるが、長年の酒を介する対処にお互い疲弊し、疲弊する時間も長く辛いものと考えられる。その間、妻は【夫の飲酒にとどめを刺す】を繰り返しており、一方で夫は飲酒を繰り返し、夫婦ともに辛い対処を行っている。

このように、夫とのストレスフルな飲酒を介した対処を繰り返しながら、やがて危機に陥る。その結果、アンビバレントな感情を含む【夫を放り出しつつ立て直す】対処や、無力感に陥り【為す術が無くなる】対処へと移行する。

共依存的な対処からの脱却が困難な理由としては、鍋山¹⁸⁾や安田¹⁶⁾は「男は稼いで妻子を養うことに、女は夫、子どもの世話をすることに、みずからの存

在意義を求めざるをえない」「夫や子供の世話をすべきである」という社会文化的な価値が、共依存行動の形成に大きく影響していることを指摘している。このような社会文化的なプレッシャーが妻を共依存から脱却することを困難にさせている。

2) 消極的対処

妻は消耗性危機の状況下で【為す術が無くなる】という対処をとっており、これは何も出来ないという消極的な対処であり、先行文献でも言及されている「酒飲みはそういうものと諦める」「なるようになると諦める」「断酒に協力せず断酒は夫次第」などの対応である。しかし、これらは消極的な対処法ではあるが、Richard S. Lazarus¹⁹⁾や岩崎²⁰⁾が述べているように、問題状況に直面し始めた対処としては有用な意義がある。多くの妻はこの対処から【夫を放り出しつつ立て直す】【最終手段を切り出す】などの対処を開始しており、一つの重要な通過点として大切な役割を担う対処であると考ええる。先行研究では、断酒会に参加し始めた頃の妻の行動として、「断酒会に参加するように説得する」「夫を恨めしく思う」「夫を追い出す」などがみられている。

【夫を放り出しつつ立て直す】【最終手段を切り出す】は、つまり妻が自分の振り返りをして、それまでの対処とは違う対処を行うことである。妻自身が我に返り自分を見つめ振り返ったり、踏ん切りをつけたりして、【最終手段を切り出す】に至ると夫は捉えている。これは妻が、共依存の関係から距離を置く対処であり、妻が自分の現状を言語化し、問題解決に向けた対処へと移行しつつあることを浮き彫りにしている。

平澤⁶⁾も、「アルコール依存症の夫を抱える妻は周辺問題から自分を解放するために、自助グループや医療機関などにおいて自分を客観的にみることに努力をしている。これは自分を表現することで自分を成長させている。この過程において妻は、考えや言動の間違いに気づき、自分の存在も含めて、夫との関係を維持していくことが大切であるという考えに変化している」と述べている。

このような妻の行動について、夫は無意識とはいえず、妻が消極的な対処から問題解決に向けての対処へと変化し移行していると感じとり、そのような妻の変化を夫自身は心地よいものとは感じていないが、一定の時間が経過した後、夫は振り返って妻のこの対処の変化はアルコール依存症からの脱却のきっかけであったと認識するに至っている¹⁵⁾²¹⁾²²⁾。

3) 建設的対処

妻は夫の断酒に向けての問題解決に【断酒会に賭ける】【他人の助けを借りて自分の安定を図る】【自分自身を見つめ自分の世界を大切にする】【一歩引きながら支える】という対処をとっており、これらは妻の建設的な対処である。先行研究や手記からも、アルコール依存症である夫から見た妻は、「肯定的な行動や、発想の転換」の対処行動をとり、協力して断酒に取り組むようになっている。

【断酒会に賭ける】【他人の助けを借りて自分の安定を図る】ことは、断酒会という社会に、さらに専門職や断酒会先輩会員・会員の妻に、フォーマル、インフォーマルな支援を求めていることである。例えば、「家族や親戚を上手に使う」「知人・友人を使い根回しをする」「入院のため積極的に動く」「無理矢理病院へ放り込む」「世間体を気にして自宅から遠い病院へ入院させる」など、多様な方法で問題に取り組んでいる。【断酒会に賭ける】【他人の助けを借りて自分の安定を図る】といった支援を得ることは、妻の能力であり、妻の健康的な対処であると考えられる。

【自分自身を見つめ自分の世界を大切にする】対処については、斎藤²³⁾が述べている19の共依存の特徴の一つ、常に他者を第一に考えるという対処から脱却し、坂井²⁴⁾が指摘するように、自分自身を振り返りながら、現在の状況を正確に把握し、新たな対処法として、夫中心ではなく自分を大切にする対処をとっていることを示しており、新たな建設的対処の一つであると考えられる。

【一歩引きながら支える】対処は、妻が夫の断酒生活が継続出来るように、明らかな言動や行動をす

るのではなく、人知れず夫と共に行う対処であり、夫を陰ながらに支えるという新たな対処法である。妻は自分を大切にしながらも、自分だけではなく、夫と共に成長することができたという認識をしており、そのような健康な面がある。

V. 本研究の限界

本研究の限界は、アルコール依存症である夫の捉えであり、妻自身からのデータではないことである。今回の研究は、アルコール依存症者である夫の飲酒行動に対する、妻の対処を、夫はどのように捉えているかを分析しているため、あくまでも夫から捉えた妻であり、妻自身からのデータではない。そのため、妻からのデータと本研究のデータにズレが生じることも考えられる。今後の課題として、妻からアルコール依存症者である夫についての捉えも研究し、その相違点や特徴なども明確にしていく必要がある。さらに、研究対象の偏りもある。本研究の対象施設は特定の地域の断酒会のみであることや研究対象者数も8名と少人数であることが限界である。特定の地域に限らず、断酒会施設についても一施設に限定せず、対象者を広げ、調査インタビューを行う必要がある。

VI. 結 論

本研究では、アルコール依存症者の夫の飲酒に関連した言動・行動を受けての妻の対処を、アルコール依存症者である夫自身はどのように捉えているかを明らかにした。それによると、アルコール依存症者の夫は、【夫の飲酒にとどめを刺す】【夫を放り出しつつ立て直す】【為す術が無くなる】【最終手段を切り出す】【断酒会に賭ける】【他人の助けを借りて自分の安定を図る】【自分自身を見つめ自分の世界を大切にする】【一歩引きながら支える】という対処を妻がとっていると捉えていることが判明した。

以上より、断酒に成功しているアルコール依存症者の妻の対処は、家族としてのどん底を経験し、共依存的対処から脱却し、消極的対処、建設的対処へと発展していることが明らかとなった。それぞれの対処は、妻がその時点で問題解決のために取り組んだ結果であり、問題に真正面から向き合い、必死に努力してきた成果である。

〔受付 '12.01.10〕
〔採用 '13.01.15〕

文 献

- 1) 清水新二：家族と共依存，清水新二編，共依存とアディクションー心理・家族・社会ー，16-57，培風館，東京，2001
- 2) 猪野亜朗，大越崇，杉野健二，他：アルコール依存症の夫を持つ妻と嗜癖傾向，アルコール研究と薬物依存，27(3)：313-333，1992
- 3) 猪野亜朗，杉野健二，志村正美：アルコール依存症の夫を持つ妻と嗜癖傾向 第二報，アルコール研究と薬物依存，29(2)：121-138，1994
- 4) 猪野亜朗：特集 家族について研究する 精神障害と家族ーアルコール依存症と家族ー，精神科，7(2)：120-124，2005
- 5) 緒方明：アダルトチルドレンと共依存，誠信書房，東京，1996
- 6) 平澤多恵子，筒口由美子，神郡博：アルコール依存症の夫を抱える妻が自分を取り戻す過程ー自助グループに参加する妻の周辺問題からの解放ー，日本精神保健看護学会誌，10(1)：110-117，2001
- 7) 高橋たか子，竹内玲子：アルコール依存症家族の回復過程ー妻に面接調査を試みてー，日本アルコール関連問題学会雑誌，7：154-159，2005
- 8) 西川京子，立木茂雄，橋本直子：家族要因とアルコール問題を持つIdentified Patient (IP) の断酒・飲酒との関連ー家族機能，共依存，家族グループ・自助グループ参加などの要因を中心にしてー，日本アルコール・薬物医学会雑誌，34(1)：63-73，1999
- 9) 西川京子：アルコール依存症患者・家族の家族機能と1年予後の関連に関する研究，大阪精神保健福祉，50：227-230，2005
- 10) 西川京子：アルコール家族への理解と支援，日本アルコール関連問題学会雑誌，第13巻：9-12，2011
- 11) 新井絢子，岡田浩明，天羽春江，他：アルコール家族教室に参加した家族の意識調査，日本精神科看護学会誌，52(2)：85-88，2009
- 12) 小俣ミエ子，石原和子：アルコール依存症者と家族の断酒会参加による意識の変化に関する研究，日本精神科看護学会誌，52(2)：228-232，2009
- 13) 山本有香，心光世津子，遠藤淑美：アルコール依存症者の配偶者の思いとその変化ー断酒会会員の配偶者へのインタビュー調査からー，日本看護科学学会学術集会講演集，29：500，2009
- 14) 高橋久美子：アルコール依存症患者の家族に対する看護，日本精神科看護学会誌，51(2)：138-142，2009
- 15) 越智百枝，酒井由紀子，高尾良子：断酒会に参加しているアルコール依存症者のどん底体験とそれに至るプロセス，香川大学看護学雑誌，11(1)：57-64，2012
- 16) 安田美弥子：アディクション家族と看護，アディクション看護，2(2)：108-110，2005
- 17) 信田さよ子：アディクションアプローチもうひとつの家族援助論一，第1版，147-180，医学書院，東京，1999
- 18) 鍋山祥子：共依存概念の混乱と問題性ーフェミニズム批判を踏まえてー，大学院研究年報：文学研究科 中央大学大学院研究年報編集委員会，1997
- 19) Richard S. Lazarus, Susan Folkman: Stress, Appraisal, and Coping, Springer Publishing Company, 1984, 本明寛，春木豊，織田正美訳：ストレスの心理学ー認知的評価と対処の研究ー，実務教育出版，東京，2004
- 20) 岩崎弥生：精神病患者の家族の情動的負担と対処方法，千葉大学看護学部紀要，20：29-40，1998
- 21) 根津和永：アディクション患者の家族へのケアー家族も，私も，あきらめず，回復を信じるー，精神科看護，38(4)：27-31，2011
- 22) 落合喜久江：特集 家族が支えあう場をつくる 3年半かけて主人を断酒へー家族の立場からー，精神科看護，30(2)：44-45，2003
- 23) 斎藤学：アルコール依存症の精神病理，金剛出版，東京，1996
- 24) 坂井佐幸美，島内節，遠藤優子，他：アルコール依存症者を持つ家族の洞察と家族関係統合化の過程ーグループ療法における専門職の機能ー，保健婦雑誌，45(8)：71-80，1989

Wives Coping Mechanisms of Alcoholic Husbands
A Study Based on the Interviews of Alcoholic Husbands of Danshu-kai Participant

Yoichi Isono¹⁾ Sayumi Nojima²⁾

1) Japanese Red Cross Hiroshima College of Nursing

2) University of Kochi

Key words: Alcoholism, Wife, Coping, Danshu-kai, Nursing Care

The purpose of this study is to discover how alcoholic husbands understand their wives' coping behaviors related to their drinking. The authors performed a qualitative and inductive analysis on wives' coping patterns recognized by their husbands, and conducted semi-structured interviews with eight married men who have been abstinent from drinking alcohol more than three years and been participating in Danshu-kai (a temperance society). As for ethical concerns, the authors asked the Research Corporative Institute for permission to do research on the project after they obtained the approval of their university's Nursing Research Ethical Review Board. Then, they explained the contents of the investigation in both oral presentations and written documents to each object, and started gathering data after obtaining the consent. In the interviews, researchers found the following results: "Quit drinking alcohol completely," "leave her husband alone and rebuild her life," "at her wits end," "broach the subject of divorce," "trust Danshu-kai," "need some help for stabilizing her life," "reflect deeply on herself and appreciate her own world," and "support her husband by giving way to him in some respects." In terms of the characteristics of wives' coping behaviors which alcoholic husbands realized, the results indicate 1) co-dependent coping and difficulty of sloughing off, 2) negative coping, and 3) constructive coping. As the implications to nurses should not regard wives' coping behaviors as negative coping actions, but as positive ones, since wives made desperate efforts when they had confronted the difficult situation in order for their husbands to abstain from alcohol.